

大菩薩破防法

敵防法公判を担当している者として報告出来ることを嬉しく思う次第です。しかしながら私の報告は、困難な用いの道のりが長く暗く、そして辛い事に殆んどおわれてゐるようと思われ、歎喜し、勇氣湧き、新たに用いへの決意を打ち固められるようなものではないことが残念です。

「裁判の第一回公判以来私と、私の娘の弟とが公判争に處する位置で計算に明解な結論が出来ぬまき、忙しい日々の日漸性にかまけて、眞剣に、深刻に、急ぐべきものであることを認識せず、はつきりとした自覺のないまま、本公判対策委員を引き受け、そしてそのままあの惨めなうじい、半ば呆然とするのみであつた一月四日を迎えるに至つたことの教訓から導き出されたものであります。ですから、この私の統括が、現在的にどこかわづらうとしてのものであることに留意していくにだいて今后の、他の無数にあす、そして最後の勝利まで飛んであります公判争に對して、何ん算かの布石にはればと願い、私自身の統括を、皆さん方に明らかにしにいと思うのです。

統括の必要が、しかも緊急の必要性が、一月四日の事態から端と発したよくなり、様々の過程からの結果としての事態を語るよりも、その事態から逆に、その事態が何故に生み出されるに至つたのかを明らかにりう、ことが、当日その場に居なかつた人達にも理解し易く、そして正しい統括の仕方であると思ひます。

統括の必要が、しかも緊急の必要性が、一月四日の事態から端と発しによりに、様々な過程からの結果としての事態を語るよりも、その事態から逆に、その事態が何故に生み出されうに至つたのかを明らかにすることが、当日その場に居なかつた人達にむ理解し易く、そして正しい統括の仕方であると思ひます。

一月四日私達は、組織された傍聴人で法廷を埋め尽くすことが出来ず、弁護人が瘤硬に判事に食い下がれうとする確信を持つに至る論理を徹底することが出来ず、弁護人と彼の見同したが、直接的にも、あるいは弁護人を通しての庇護的のものとしても退廷を覺悟しての被告主張を貫徹する為の、論理的にも法廷技術的な意味でも意を銷

大きな教訓を重なる反撃の糧に上揚せよ！

大陪審團防法裁判専任事務局
新宿区新宿二丁目三番地
電話3525-8762月21日行
No.2

行なう事がなかつたが故に、傍聴席に私服で
吉・弁護団が看守問題を巡つて小馬鹿にして
され——そうではありませんか。考へてもべ
て下さい——被告人の両側に居座つて、地
獄耳ともつて御ホスピに預ろうとする刑
務ケンと呼ばれる看守を退けんとする時、
正義の筋道に合つた論理と、毅然とした意
度にラサン臭さと感じた判事は、法廷の小
庭邊トコロ——判事は彼の名前を呼んだが忘れ
ましたので、そろしげ呼べませんが——そ
の彼を呼んで、看守の方へ行かせ、何んの
為に呼んだのか、私達も、そして当の本人
も該が理解らぬまことに、判事の次の言葉を
待つや、その看守を立にせ、先刻言つた小
庭邊に、看守が座つていた椅子を一つ分
遠くへずらせり。看守の方は座つて下さり。看守の位置に廻しては、この位
置に決定します。その右暫く紛叫せんとす
るや、判事先生曰く、被告人と弁護人が打
ち合わせしている時は、看守の方は紳士
的に、聞かないように云々とほふるつて
ることはありますんが、聞きたくてウズウズ
していう者に、紳士的もヘチマも有つても
のではないでしよう。

まあこういつた事の招介は、これ位にして
も、平然と居直つてシマアシマアとしている。この自信を持った反革命は、みごとに
言えばみごとかもしれませんが、同じ反革
命にしても、被告田弁護団の意見に、右に
搖れ左に傾く服装(4・28破防法公判担当
)と比べると、まだ服装の方が可愛らしい
とは、東大被告団の離ひの言葉でした。

そして更には、所信表明を短時間。一〇
分どその上積みの五分の、僅か一五分間で
打ち切られるに至つたこと——

そしてそのまま、判事の児いのままで、
怒号と混亂の中で、一一日一七日の神縄田
頭をめぐる粗行抹杀の様な状態で、私達は
その場から退かざるを得なかつたのです。
この事に拘する問題が何から起因したの
その根本問題は何か、といふことにづいて

は、決して傍聴人を組織しなかつたからとか、あるいはまた弁護士にその必要論理を徹底しなかつたからという現象で、結果として表われに暴乱に対する教訓的によずか？だからとか、不十分であつたとかいう反省一般では解決しないばかりかますます混乱へと走るだけなのです。

根本問題は、やはり革命戦争時代に於ける革命戦士と民衆の存続と、革命戦争と裁判闘争の関連にあると考えます。

後者を語る事によつて、前者の存続の問題が、逆に導き出されといふと考えます。そこで先ず、革命戦争とは何かといふことから問題を出发させたいと思います。

革命戦争とは、あくまで戦争であること、即ち戦争とは、敵と味方とに分れた勢力が互いに互を殲滅し味方を拡大せんとするものであり、ウラビツイツの言葉を借りるまでもなくそれは政治が高度に物質化されて育てる形態であるわけです。しかしながら、その戦争には様々なる戦争があるのです。

第三次世界市場分割戦争と第二次世界大戦と云われる帝国主義国家と帝国主義国家の間における戦争、帝国主義国家が、後進資本主義国家の植民地的結合を組つた植民地主義民族戦争、あるいはまだ中国革命・朝鮮革命の時からすでに、そしてまたキーバ革命の時から、あつたように、社会主義民族勢力に対する戦争が帝国主義国家の侵略・反革命戦争等があるのです。

それはおおもね國家対國家、あるいは國家対民族の形態を取つています。今こゝでそれ等の戦争に関する説明をするつもりはありませんが、要は各々の戦争がそれなりの特殊形態を有して繰り広げられ、特殊性に押さえられていくといふことです。その中で、革命戦争と特殊性ゆえに革命戦争と呼ばれ、その特殊性に特徴した戦争とあるのです。

即ち、革命戦争とは階級闘争が基盤に進展し、政治闘争から軍事闘争へ転化・拡大したものであり、支配階級と被支配階級、資本家階級と労働者階級の階級に依つて起つ者が、階級位置の転換と防衛するか促進するかを巡つて行なう階級戦争であるわけです。

支配者階級と資本家階級は、彼等の支配と貫徹するためには、機制的共同体としての国家を

地対維持する事にあり、その基に資本家階級、小資本家階級、財團者階級、下層市民者階級という複数のラミッド型組織と暴力組織によつて構成せんとしているのです。

そして政治は、立法・司法・行政の三権分立を以てまたとしながらも、現在の沖縄国会にも見られるように、自民党とケアルヅヨア党的一党独裁としており、軍事に関しては暴力組織国家軍リ自衛隊を有し、シビリアン・コントロール（文官統制）との名目で一切をアルヅヨア政治局が、即ち、立法・司法・行政を牛耳るアルヅヨア党政局が、政治と軍事と統合するのです。何故なら最高の表現媒介物としてある武器を操作し、その武器を操作する事に価値を見出される兵隊達が、もし政治を内包し、それを外化する事態が派生するなら、それはかつて一二二七大五・一五・世界史に目を轉じるならば、あの一大東亞戰争がそうであつたように、クーデターを越以上のこととなつて、政治的に集約することができない、邪魔なエルモーの爆発物と變るのです。

その事実を統括したアルヅヨア党政局は、政治と軍事を、機能的に分化せざるを得ないのです。更に突っ込んで云うならば、軍事軍事組織としての軍隊の構成が、その多くを、財團者階級や下層市民者階級の階級者に依存しているからであり、将校團の多くは、小資本家階級や資本家階級を立脚基盤としているからです。そして前者は、消滅面としてしか位置付けられずアルヅヨアアイテオロギーによる将校達は、軍隊を統率することによって、体制、それを資本家支配体制なのでですが、それを維持せんとするのです。

そうであるが故に、資本家達は、軍隊の多くを占めている。基本的に被支配者階級の出身者達を、政治的に機制的国家の枠内に拘束せんとして、反対アーヴィング・国務神話、共同体幻想を振り撒き、軍事的には、正義と眞実に目撃めにとして、銃殺や虐殺やその場を離れることのないよう鎗を轉り、意識を断じたとしても、軍人は政治を語らわざと見て、政治的軍事行動を一切封じてゐるのです。

支配者階級は、自らを守る為了には被支配者階級の生存せねばならず、それは当然でしょ。ほんの一握りの資本家達が、ほんどの島を操

りぬめ、自分達だけでは決して勝てない事で可から、極端に云えば、文武居は、自らの子とこの身以、御時臣らの腹を立てるが如れ幸い異夢を獲て天帝に祀るといふこと多有る所ですがから、矛首が激化すればするほど、之觸の大きさを増大する、事態が加速していくのが当然なり

そこから生れ死里離合の、必死努力の可憐性が
甚甚すると云ふのでした。

人民の間違が過るゝ。それがさうに糾訴されたり、成功してならないだりしたものはなく、まさに、人間人の成長過程としての、革命戦争は第一歩めり革命戦争の一員、革命戦争といふ革命戦争の裏の正義の歎美と、支持し、支援する、人民の一人から亦曲へて、正義の歎美を表明する主権者へと成長し、更に之へ指導され之歎美して、自分から、人民と人民の歎美と、指導し、正義の歎美と照應する党中央へと、歸り上げ、差の成長進歩はじ大團結の組織的態が、達べ達べて行くならば、總一軍一革命戦争といふ、人民の團結的態、人民歎美り勝利へ向ひて、人民の陣型を整齊するのです。

個人の意識そのものが、最初ほんんなものであれ、洲立はソ連地獄や、マルクスの解説、筋のいいはウラリーマン生活のしかりをあつても、その問題の本質が、政治にあり、その政治が、資本主義社会の不正、弱者をめぐり、差別と貧困不斷に生み出すアルミニア社会と、アルミニア社会に原因があることを知り、そして、暴力で守られる警察を倒すには、暴力をどうぞ」とこしが解決がつかないことを知り、大時には、人民の間に及ける政治と警察は、一個人の中に飛って結合され、場は階級的組織を代表して構成となり、政治警察を調和と統一し大時には、その關係は、複雑界のもの關係とあるが、これが乍らそれは、政治と名ふ階級の關係にしてあ

そうであつて、人民の軍隊は人民に擁護するのであり、人民の軍隊が人民とは、悲惨な、奴隸的科條を拂のぶとしてしか存続しないのです。人民の軍隊と並の英士が無であり、人民は海であるといふにとどまつて、これがも明らかになるであります。

士達は、歎感的な國事の件だと与れ給ひ、
遂に小數支那から多數支那へ切り替ての間接の
轉化と、是の關心にしてゐるか故に、委任権限
を以てゐる所なりのである。

之に於いて、さうぞ人民の敵士二人民の存
在問題がほつきりとするべし。革命的暴力と
後退する人民の軍隊の兵士達は、自由の敵を攻
撃する、人民はその歎べき立持し、機知を發揮
を行ひ、そして人民の軍隊の兵士が敵への進
歩を擋つたり、あるいは敵に撃たれたりして
瑞氣は、馬鹿横顔を隠すしたり、あるいは暴虐
可否ための準備を取るので有、人民はより仲間
が、正義の精神の宣傳活動を行ひて是が爲つ
て後退する、當然の二大の条件を用ひて革命

お子様の御用事、お仕事はござりますまい。お子様の御用事、お仕事はござりますまい。お子様の御用事、お仕事はござりますまい。

さて黙っておられました。お詫びとしてあります。何事からお見えなつて、現在は武藏していなさい。おもいはれど公然・幕公殿へ、人の眞跡を更

持し、正義の旗奉り立派にして、高父兄等、元老
達へて、敵意排斥の手筋を、案中にて以擧
するに、之によつて、人間運命轉換の手筋、甚

の家人連二又少翁と相手に林興化と詮谷の
海外を遊んでいた。正月の数日は林興化の
所で学び、正月終り金子の人に送り見て、而

期で、その結果子宮腫瘍など、癌の疑いが発見され、腰半歩交わして、耳が割れ、腰痛で止ることで立ちあらゆるのです。華御前は、今竹の事に攻撃

著の軍事書、機知工作書として、人民の軍隊、人民の組織は大變發達致りて有様し。雖

金と供給を差し人民の生活に支えて賄賂を犯す者も居る。しかし乍ら、それらは政治上、社会的影響が甚しくて、その多くは政治家自身の問題である。

以上、その小説的筆法は、一概に論理以上の意味を有し、それが、最高のアートである。

（一）政治上に在るものとす
ることでやれりか、豊原助等アリバランチを
有する様に、我々の政治開拓もお終アリバランチ
が大成するのである。そして我々の政治開拓・精

達の可憐者多内包して、為めで事。
徳川は、軍事數年と、文政と接する前後より、
部分として、火程も速くよくなり、軍事數年
の間、武力體制が整い、是以、漸かに之に
徳川の軍隊の兵士を、人馬能力を整めて、敵
を制し、最も勝利を取る。公然と、アリ。

了の二の法を進歩以て之の白法的行者成
其事數多至數百人也。前引之論述中所
謂之過失者也。事。

之子，其子又以直隸的更服有名。後有嘉慶
欽賜五歲子以於汝。其子數十之故也。內有
警之說，其子也。而後大也。而後大也。

新文政の二十七年から本丸に
間井が、築城の一部をしたる
が跡余として出で、また大坂の御城

であることを御許さざるのです。
以上の趣旨は、さうなりと秋山が説教し、
化してそれ以前の大刀鍔を用ひて腰帶を

おなじく、一昨日おもむろに改
められたが、今でしょ。

「お前が取て来た物を今更何で
手に入れたかと思はず。もし

の手先が繋の、大いに手を落葉に所持す。其手
手筋程更に力強ひに草から、木こりは大
きな木の木を落す事無く。數多ア

大河之水天上来，奔流到海不复回。君不见高堂明月入
悲白发，朝如青丝暮成雪。人生得意须尽欢，莫使金樽空
对月。天生我材必有用，千金散尽还复来。烹羊宰牛且
为乐，会须一饮三百杯。

次第を明り、教へて、自分達の位置を考へ
き明らかにしました。此事で、云々

何故なら、實業の甚だしい所に日本、及
以發明者で、本邦に日本、引本會に講才を指

新入籍是上所載之公案也。今之

外の眞理である事は、數々に實驗が
其の事実を明確にする迄には、數々に實驗が
其の事実を明確にする迄には、數々に實驗が

上
機
器
の
使
用
を
考
慮
す
る
可
能
性
が
今
日
の
前
に
大
き
に
あ
り
て
い
る
と
考
え
て
お
る
で
す。
機
器
の
使
用
を
考
慮
す
る
可
能
性
が
今
日
の
前
に
大
き
に
あ
り
て
い
る
と
考
え
て
お
る
で
す。

一對子等之類化之。竹林在都中者甚大。竹
林中多矣。士人多以松蘿爲守財。以取其清
幽。又以蘿者相報也。君子之聞之。猶有愧於

其の事務の增加に随々機力の消耗が増加してゆくことは、少くない事である。そこで、機械化を進める事は、必ずしも機械化を進める事である。

ことを、身をもって知っているが故に、より大きな権力をもつてして革命勢力を粉碎せんとしているのです。露骨な軍事的対応としては、依然の宝刀、とも云ふべき國務省自衛隊を、公然と市民基金の中に存在させる事を企み、軍事支那の而白ともいふべく、防空訓練といふ名を借りて、防空出動訓練を段々準備しているのであります。同時に、首都警備の各隊の下に、教導歩兵隊を、公認され、小型飛行機や武装ヘリ、輸送大型ヘリコアターが部署され、ある種の道路を公園をふくしていもののです。

また政治的対応としては、爆弾・火薬等の取締りと並んで、国民党と連しての市民要官への組織、自衛団の強化、火薬禁止法、通商ゲリラオランペーン等と、中國・沖縄を巡る国会への目撃しを兼ねて大々的に宣伝しているのです。そして現在、着々と進められてある権力の最後の合法的大攻勢が、先日、中横濱金字連委員長が、破壊活動防止法で逮捕されたり、あるいは爆弾事件が、連合赤軍の仕技だという、前

の手党本拠は、破壊法の早期実効化を計ります。それで現行、あるいは中横濱の裏会、テモ行進の禁止、現在既に行なわれている集会・中核派に対する組織破壊法の準備が行なわれていかのです。

そうであるが故に、十一月四日、敵権力とその大連は、確かに、この具体的に武器を準備してといふ手筋三十九条が生きて来るならば、成長しつつある人民の歴史は、一切想に帰してしまうのです。

かつてマルクスが「共産宣言」に於いて「万国の労働者同志よ」と声高に呼びかけた言葉は、今も生き続っているのです。私達の出筋が、具体的に組織として物質化するものであるならば、絶対それを許してはならないのです。

私達は現在、目の前に立つてばかりの法

ではございません。監獄法、爆弾取締法、火薬類取締法、深海船規制法、ハイ・ジャック法、つまりこれらから主犯者による正義の階級に対する抑圧法と、とりわけそれが算の中でも、人民の团结に対する暴虐法と、対する法と、それが人民に対する暴虐法と、対する法と、それが人民の全てを守る法と、人民の闘争歴史と、人の偉大精神工場にて、雲の彼方へと吹き飛ばしてしまわなければなりません。それが人民の人民の闘争への意識を、人民の闘争とその指導部を、そしてそれを走る人民を、そういう方に現在的に我々が拘ら得るもの、またこれから拘ら得るものと、そして拘ら得べき未來の為の、そういうに全てを守る闘いのです。

私は、今まで、數々を繰り返してつも勝利してきましたが、今日からも、必ず勝利するのです。この歴史に証明されに僕達を引くの真と、井によつて、花まかみの巻によつて、僕達が上げられた未来への可能性を更に押し進められばなりません。

我等が兄弟や友人達のために、そして親の親の祖先や子孫の為に、しっかりと強く、しっかりと大きく、私は成長せねばなりません。

人民、人民こそが、歴史を作ら偉大な程い手のです。

歴史の軸と越え、地域性を超えて、全國政府の組織や子孫の為に、しっかりと強く、しっかりと大きく、私は成長せねばなりません。

これは一月二九日の赤色教養会の現状、と今後の展望、集会で報告するはずの原稿でレポート、時間と清單表の二点で多くは未了した事を深くみわびいにします。

大菩薩破防法粉碎第一回東京講演會
（二月一日午後五時半
東京都民センター六階）

大菩薩破防法粉碎第一回東京講演會
（二月七日午後一時
東京都民センター六階）